

## 論文の内容の要旨

論文題目 「月次風俗図屏風」の図像学的研究

氏名 井戸美里

「月次風俗図屏風」は、山口県岩国の吉川家に伝来した。本屏風の描写内容は典型的な京都の行事に限らず、京都以外の土地や史実・物語に取材した場面も絵画化しており、それらの週第がフォト・コラージュのように混ぜ合わされて一つの画面が国政されており、このような作品は、画面構成上また主題選択上の双方の点において他の同時代作品と一線を画している。にもかかわらず、先行研究では、本作品をそれぞれの学問分野において部分的に資料として扱うにとどまり、本作品の成立背景や描かれた主題・モチーフの意味などについては論じられてこなかった。博士論文では、「月次風俗図屏風」における基礎的研究から初め、その成立背景、描かれた画題やモチーフの個々の図像研究を行うとともに、伝来の地を共有する田植歌のテキストである『田植草紙』、さらに、山口県に伝来した「四季耕作図屏風」という三つの作品に描かれる風景の比較を行い、これらの作品の成立を導いた共通の土壌を明らかにすることを試みた。

第一章では、「月次風俗図屏風」について作品調査の結果をまとめるとともに、本作品の鑑定を極めた江戸の御用絵師、狩野探幽筆による極札と未紹介の東京国立博物館蔵の同じく探幽による本屏風の縮図を突き合わせることで、本作品が吉川家周辺で成立した可能性について論じた。制作年代はこれまで室町時代後期とされているが、本屏風の個々の主

題（花見図、犬追物図、富士巻狩図など）の成立時期や、下降的なモチーフ（肩衣の描写、唐子・長小結など）が見られることから、一六世紀末、桃山時代まで成立を下げた。また、描いた絵師については地方絵師の関与を想定した。

画題のなかで、〈大田植〉と〈富士巻狩〉という他の風俗画作品には描かれない、本作品に独特の場面は、吉川氏と関わる主題であると解釈した。他よりも多くの空間を割いて描かれた〈大田植〉と〈富士巻狩〉には、それぞれ吉川氏のその当時の支配下である広島県山県郡大朝、吉川氏興りの地である駿河の地が呼び込まれていると考えた。実際、吉川氏の先祖は建久4年の富士巻狩にも参加していたことが知られる駿河出身の東国武士であり、その後、広島の地に統治の場を移した。〈大田植〉は吉川氏の本拠地であった広島県山県郡大朝において現在でも行なわれている、中国地方に特有の盛大な田植の行事であるが、その地から第二章で考察した大田植のテキスト『田植草紙』が発見されていることも偶然ではないと考える。また他の画題に選ばれた行事や風景が、戦国武将の武家故実や年中行事と関わりの深いものであること、そしてより具体的には、吉川氏や毛利氏などの支配した国の風景の残像を留めていることを指摘した。そこには、西国において秀吉政権を支えてきた吉川氏や毛利氏のアイデンティティと深く関わる両者の共有する記憶や風景が可視化されたものであると思われる。

続く補論においては、「月次風俗図屏風」の画題のなかでもとりわけ珍しい〈富士巻狩〉が描かれた環境について、当時の戦国大名などによって享受されていた幸若舞曲「曾我物」の性格や上演の場との関わりという点から再考を行った。「月次風俗図屏風」に描かれる唯一の物語『曾我物語』の〈富士巻狩〉は、源頼朝が実際に行った大規模の狩猟であるが、王権的なテーマとしての側面のみならず、この巻狩の夜に実際に起こった曾我兄弟による父の仇射の物語が、文学、能や幸若舞などの芸能などの口承文芸に早くから取りこまれていた。さらにこの物語を絵画化した幸若舞曲に影響を受けた「曾我物語図屏風」の画面構成の分析を通して、幸若舞曲と同様このような屏風絵も、当時の武家たちが集う寄合の空間において披露された可能性を指摘した。仇射により非業の死を遂げた若い兄弟の物語は、このような場において、戦国期の武将たちの共同体の空間を支える装置となっていたと考えられる。

第二章では、大田植のテキスト『田植草紙』に歌われる詞章について考察した。「月次風俗図屏風」を他の作品と隔てるもっとも重要な画題がこの〈大田植〉であると思われるが、この歌謡には一見不可解な詞章が多く十分に解明されているとはいえない。しかしながら、「月次風俗図屏風」に描かれる風景を介することで、両者に共通するまなざしや、本歌謡の伝承圏である大朝という土地に根ざした歴史の記憶を読み解いていくことが可能になる。またこれまで、『田植草紙』は、概ねこれまでの研究では大田植において田植に参加する田人の視点を通して解釈されてきたが、大田植が民衆を主体とした行事ではなく、在地領主や名主などの地主的な立場の人々の田において催される行事であることに留意するならば、大田植の主催者の視点から編成されたテキストと考えることもできるだろう。吉川氏や毛

利氏の戦国大名の領国下で歌い継がれてきた『田植草紙』には、田植とは無関係の富士巻狩、京上りと京下り、当時の商品の流通や蔵などを多く含む。『田植草紙』は、吉川氏だけでなく、彼ら戦国大名の保護のもとで活躍を遂げるような、在地の間丸的富裕名主層を田主とした大田植のためのテキストであると考ええる。

第三章では、「月次風俗図屏風」と同じ環境で描かれたとされる「四季耕作図屏風」（山口県某家伝来）がある。この山口県伝来「四季耕作図屏風」を現存する他の多くの「四季耕作図屏風」と比較して明らかに異なるのは、「月次風俗図屏風」にも描かれる大々的な大田植の風景を描いている点である。第二章の『田植草紙』も合わせれば、大田植を扱ったこれらの作品はすべて広島、山口などの地方と関わる場で成立したことになる。また、通常の「四季耕作図」には決して見られない、中国大陸や朝鮮半島を往来した唐船までも登場する海辺の風景が描き込まれ、塩田や海産業などさまざまな生業に従事する人々の姿が描かれる。『田植草紙』には京都や大陸に対する憧憬を交易品などとともに歌い込んでいる一方、山口県伝来「四季耕作図屏風」は、日本の風俗も描きつつ風景全体が中国もしくは朝鮮半島の建築や風俗となっており、そこは米や野菜、魚介類などの富が集積する場として理想郷的に描かれる。このような「和」「漢」が混在する現実には存在しない土地には、大陸や朝鮮半島への境界として、むしろ戦国時代の動乱を経た京都に代わる新しい土地としての瀬戸内の港湾風景が重ね合わされていたのではないだろうか。